

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点
 「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際研究拠点」
 2020年度 国際共同研究成果報告書〔研究費配分型〕

2021年5月10日 提出

1. 研究課題名	
元禄歌舞伎のデジタル再現のための基礎的研究 (英文課題名: Fundamental research for digital reproduction of Kabuki in Genroku era)	
2. 研究代表者	
氏名 (ふりがな) いわい まさみ	所属機関・職名
岩井 眞實	名城大学・教授
3. 研究分担者 (合計: 3名)	
氏名 (ふりがな)	所属機関・職名
鳥越 文藏	早稲田大学・名誉教授
佐藤 恵里	高知県立大学・名誉教授
東 晴美	群馬県立女子大学・講師
4. 研究課題の概要 (300字程度) (申請書から変更がある場合は、変更点分かるように明記してください)	
<p>歌舞伎は、京都が発祥の地である。その歴史を辿ると、元禄歌舞伎時代があり、世界の演劇全体に比べても、最も洗練された演劇が京都を中心として展開していたことに気づかされる。しかし、元禄歌舞伎には、映像はもちろんのこと、台本もほとんど存在しない。ただし周辺資料は数多く残されており、これらを有機的につなぎ合わせれば、当時の演劇の実態を再構築することが可能である。従来、それらの資料は単なる資料群として個別に扱われることがほとんどであったが、デジタル・アーカイブの上に構築する有機的な資料群は、いわば三次元の世界を再現することが可能である。</p> <p>対象となる資料は、絵入狂言本、役者評判記、あるいは歌舞伎番付である。なかでも、絵入狂言本(歌舞伎の絵入筋書き本・台本に近いものもある)は舞台を表現した絵画とともに、筋書、出演者の配役などが詳細に記載される一級資料である。</p> <p>2018年度においては、国内外に存在する絵入狂言本の所在調査をほぼ終了した。2019年度はこれを承けて、網羅的なデジタル・アーカイブ型研究を推し進め、そこに含まれる絵画表現とテキスト表現から立体的に情報を抽出して、元禄期の演劇舞台では何が行われていたかを可視化した。</p> <p>2020年度はコロナウイルス蔓延の影響で、資料収集活動は前々年度・前年度ほど活発にはできなかったが、それでもいくつかの書誌調査を行った。また、デジタルアーカイブにアップした資料の点数も格段に増した。現在はその成果の一部を出版物として発表する作業を進めている。</p>	

5. 研究成果の概要 (この項は、本センターのホームページ・紀要等で公開することがあります)

2018年度、2019年度の成果を継承し、各所蔵機関の所在調査・書誌調査を行い、その結果をARC「絵入狂言本データベース」の画像データベースに反映させる作業を行った。この作業はほぼ最終段階に入っている。

その成果を紙媒体で発表すべく、『狂言本総覧』〈日本書誌学大系〉(青裳堂)の原稿作成に取り組んだ。同書は2021年8月～9月に出版予定である。この作業には赤間亮・立命館大学教授、和田修・早稲田大学准教授のご協力を得ている。

ただし、コロナ禍の影響で閲覧がかなわなかった所蔵機関が数ヶ所ある。これについては本事業終了後も継続して調査を行っていききたい。

6. 研究業績 (日本語以外に英語名称もあるものは、できるだけ日英両言語でご記入ください)

(1) 著書

- ・『歌舞伎の出口・入口』、共著、2020年4月、郡司正勝先生研究会、鳥越文蔵 他、pp. 31-35
- ・Japanese Political Theatre in the 18th Century -Bunraku Puppet Plays in Social Context、2020年7月、Routledge、小田中章浩、pp. 1-228 (全頁)
- ・『菖蒲太刀対侠客』、共著、2021年3月、国立劇場調査養成部、埋忠美沙・佐藤かつら・寺田詩麻、pp. 99-178

(2) 論文

- ・特になし

(3) 研究発表等

- ・民俗芸術学会 第159回研究例会「日本統治下台湾の能・歌舞伎・浄瑠璃興行をひもとく」コメンテーター、2021年3月14日

(4) 主催したシンポジウム・研究会等

- ・特になし

(5) その他研究活動 (報道発表や講演会等)

- ・特になし

(6) 受賞学術賞

- ・特になし

(7) 科学研究費助成事業

- ・特になし

(8) 競争的資金等 (科研費を除く)

- ・特になし

(9) その他